

鷹巣誠一作 テーマ「自由」① 「規則なんてケノ食らえ」

- 効果音 (教室のガヤ)
- 先生 えー、新学期も始まったが、まだ休みの気分の抜けない者が大勢いるな。明日の学年別町会で検査をするから、男子女子とも頭髪をきちんとしてくること。金がなくて行けない人は、わたしが明日バリカンをもって回るから、遠慮は要らんぞ。
- 佐藤 おい、ただだぜ。せつかく休み中にパーマかけたのによ。
- 山田 仕方ねえよ。バリカンよりヤマシだろうが。
- 佐藤 それは言えてるけどよ、何かといや規則だなんだって、やってらんないぜ、全く。
- 山田 そうそう。「喫茶店はダメ。ディスコはダメ。友達同士の外泊はダメ。運動靴での登校はダメ。Tシャツはダメ。登校には必ず学生カバンを使用すること。その他大勢。」これだけそろってりゃ商売がでたらあな！
- 佐藤 (小声で)シー！ あんまり調子に乗るな、アホ。先生が見てるぜ。
- ナレーション …とまあ、こんな感じで、この学校の生徒、あまりに多くありすぎる規則に反発を感じ、ほとんど守らないようでした。(間)その日の放課後――。
- 久美 ねえねえ、山田君、佐藤君。今度、家の近くに新しい喫茶店できたんだけど、みんなで行かない？ 純子も誘ってさ。
- 佐藤 いいねえ。でもおれ床屋へ行ってこなきゃなんないからさ、皆 着替えて5時半に集合ってのどうだ？
- 山田 おれは別に構わないよ。着替えも持ってるし、30分ぐらいパチンコでもやって時間つぶすさ。久美はどうする？
- 久美 わたしは純子を誘って一度家に帰ってから行くわ。それよりも山田君、先生に見つからないようにしてよ！
- 山田 任しとけて。それほどドジじゃないよ。
- 佐藤 じゃ5時半に久美の家の前でということで、一時解散と。それでは皆様、後ほど。バイバイ。
- ナレーション こんな具合に、皆、規則なんてなんのその、うまい具合にやるもんなんです。そして約束の時間――。
- 佐藤 よ！ 皆待つ……たようでもないようだね。
- 純子 (気取って)それでは皆様、参りましょうか。
- 山田 うむ、そろそろ参ろうか。茶でも飲み、なーんちゃって。
- 一同 (笑い)
- ナレーション 本当に皆楽しそうです。規則のことなどは忘れて、今が青春ど真ん中という感じです。彼らにとって、規則を破るということに罪の意識はありません。彼らは、規則を破ることで自由を勝ち取った気分なのです。
- 効果音 (喫茶店内)
- 山田 おれはコーヒー。みんなは？
- 佐藤、久美、純子 (口々に)「おれココア」「わたしはカフェおれ」「わたしも」
- 純子 ねえねえ、今年の冬、スキー行った？
- 山田 おれは家で寝てたよ。

佐藤 おれなんか蔵王だもんね。気持ちいいのなんのって、最高だったよ。

久美 (純子の顔を見ながら)わたしたちはねえー。

純子 うん。二人で北海道へ行ってきたのよねえ。ちょっと寒かったけどね。

ナレーション こんな話をしているときに、店の奥から純子の中学校の時の同級生だった陽子が出てきました。

純子 陽子。

陽子 あら純子、どうして…。

純子 あんた、ミッション系の学校に行ったって言ってたけど、どうなの？ ね、ところでさ、カウンターから出てきたところを見ると、これ、陽子の家のお店なの？

陽子 そうなの。今度こっちのほうに土地を買って引っ越してきたの。(間)ところで、あなたたち、こんな所に来てていいの？ さすがにタバコは吸ってないみたいだけど、学校で禁止されてるんでしょ？

純子 そりゃそうだけど…。

佐藤 かまやしないよ。僕らは自分に与えられた“自由”というのを味わっているのさ。規則なんて全部守ってたら、まるで“かごの中の鳥”だよ。

久美 そうよね。規則は守らなきゃ意味がないけど、全部守っていたら自由なんてなくなっちゃうわ。

陽子 でもね、そんな自由が本当の自由だと思う？ 罪を犯してまで得た自由が。

久美 “罪”だなんて、そんなシラけること言わないでよ。

純子 だけど、“本当の”なんて言われると考えちゃうわね。

山田 うーん、“本当の自由”か…。

純子 よく分からないわ。陽子、あなた、分かっているの？

《続く》